

インタビュー日：平成31年1月18日

歌手・バンドウーラ演奏家 ナターシャ・グジーさん

—— 1986年のチェルノブイリ事故が起こったときに身近で経験されたとお聞きました。

はい。事故が起きたのは夜中で、私たち一般市民には知らされず、朝起きて普通に生活していました。その日はとても天気の良い土曜日で、お母さん方は外で子どもたちと遊んでいましたし、私たちもキエフの人形劇を見に行く予定でとても楽しみにしていました。でも事故の噂が広がって、私の母も噂を聞いて外に出ちゃいけない、人形劇も行けなくなると、私はまだ6歳と小さかったので理由も分からなくてとても悲しくて泣いていました。

—— お住まいは原発からどのぐらいの距離だったんですか。

3.5キロのところに住んでいました。原発の近くに、原発の建設と合わせて新しく創建され、主に原発で働いている人たちが住むプリピャチという町がありました。30代位の若い家族が多くて、幼稚園や学校が作られ、綺麗で住みやすい町でした。私は、その町に近いヤノフという小さな村に住んでいました。そのヤノフは原発に近く、森があってその森の向こうが原発という感じでした。

—— 避難することになったのは？

私達一般市民に避難のアナウンスがあったのは確か、翌日曜日で、3日

で帰ってくるので3日分の必要な物だけを持っていくようにと言われ、私達はそれを信じて従いました。当時生まれて1ヶ月の妹がいて、私を含めて4人姉妹でしたので母が、私達の着替えや赤ちゃんのベビーカーだけ持って村を出ました。私は大切にしていた人形があって持って行きたかったけれどダメと言われて、本当に悲しかったです。

プリピャチの人たちのためには2000台の避難バスが用意されたのですが、私たちの住む村は、プリピャチからちょっと離れていた所以我们たちで避難することになり、近くの駅から列車で避難しました。突然の事で避難先も

わからず、とりあえず母の両親が住む村に向かうことになりました。

—— その後、何ヶ所か避難場所を移動されたとか？

祖父母にも家族もいるし私たちも大家族なので、ずっと一緒にいるのは気持ち的にも金銭的にも難しく隣の町に移りました。そこには男女別の大学の寮があって、女性寮に部屋をもらいました。事故前から原発で働いていた父は、事故が起きてからも原発で働いていて、原発と避難先を行ったり来たりでした。帰ってきても父は男性寮で、しばらく別々に生活をしていました。その後、その年の秋頃にキエフに避難しました。キエフに新しくつくられた地域があり、その団地に主にプリピャチから避難してきた人たちや、

父と同じように原発で働いている人とその家族がたくさん住んでいました。

—— プリピャチは日本の強制的避難地域のようにもう戻れない地域になったんですか。

はい。私が住んでいたヤノフを含め、原発から30キロ範囲の中は今でも立入禁止です。

当時、家族で避難するとき、同じ様な人がたくさんいて、特に高齢のおばあちゃんなどが荷物を抱えながら、住みなれた村をなぜ今離れなきゃいけないのか、と泣きながら叫びながら声に出したり、子どもたちが、のどが痛い、頭痛がするということを訴えながら泣いていたりしたのをよく覚えています。

私は、最初は3日で帰ってくるという言葉信じていたし、置いてきた人

形にもきっと会えると思っていました。でも、友達ともちゃんと別れもせずに村を離れることになって、避難する列車に乗ったときは、またここに帰ってくるんだ、という思いが消えてしまいました。列車が動き出して大好きな景色、大好きな森がどんどん流れていくのを見たときに、この景色を見るのは多分これが最後で、もう見ることはできない、自分が帰ることはきっと二度とないということを直感的に感じ、その瞬間に涙が止まらなくて、ずっと泣きながら涙の向こうに映る景色を一生懸命に自分の心に焼きつけようと思って見ていました。

—— 日本に来られることになったきっかけは？

避難して、私もそうですし、周りにも、体の病気だけではなく、心の病気、悩みを抱えている子どもがたくさんいました。それを薬ではなく、音楽や歌・踊りで元気になろうという事で作られた「チェルボナ・カーナ」という音楽団がありました。この音楽団に入っているときに、日本の救援団体に呼んで頂いた事が、日本に来たきっかけです。その後、日本とウクライナを行ったり来たりしている中ですごく日本が好きになったのと、自分が伝えたい思いを自分の言葉で伝えられたらいいなという思いがあって、日本に住み始めて今年で20年目になります。

—— 日本でも残念ながら2011年3月に福島第一原発事故が起こったのですが、そのニュースを聞いたときはどんなことを考えられましたか。

ニュースを聞いたときは本当に大きなショックでした。日本にも原発がたくさんあって、しかも地震がとても多い国なので、自分が経験したことをこ



の日本で伝える意味があると思って、自分と同じような経験を二度と誰もしないように、同じような事故が起らないように自分の経験を伝えてきました。でも、同じような事故が起きてしまって、私の目の前に浮かんだのは子どもたちの姿です、当時6歳だった自分と同じような思いは日本の子どもたちにはしてほしくないと思っていました。自分の無力さ、虚しさ、悲しみがとても大きくて、泣き続けていました。

—— **事故が起こった直後にホームページでビデオメッセージを流しておられましたね。**

でも、色々考えているうちに、もしかしたら自分はこのために日本に来たんじゃないか、今自分にできることがあるから自分はこの日本にいるんじゃないかという風に思えるようになり、そこでやっぱり日本の子どもたちのことを真っ先に考えました。私も自分の親が悩んだり苦しんだりしているのを見て色々思う事がありましたし、もちろん家庭の事情などもあって簡単に決めることもできないけれども、子どもたちのことを考えたときに、少しでも安全な、放射能の心配のないところに1日でも早く子どもたちを避難させたほうがいいのではと思ってメッセージを発信しました。

放射能は目に見えません。でも、目に見えないからこそその恐ろしさがあるので、取り戻すことができない事になる前に子どもたちだけでも避難させてあげたほうがいいんじゃないかと思いました。

—— **関西にも福島周辺の方から避難してきた方、特に子どもが心配で、子どもの未来のために避難したという方がたくさんおられます。**



目に見える病気の心配もとても大きいですが、その中でもなかなか気が付きにくい心のケアに目を向けてあげることがとても大事じゃないかと思っています。子どもも親に心配をかけたくなくて、自分の考えや感じていることを口に出しにくい。でもみんな色々なことを抱えながら事故の後の日々を過ごしていると思うので、それを言わないからといってこの子は大丈夫ということではないと思います。心の面を大人の私たちが真剣に考えてあげられたらいいなと思います。

—— **私たちもいろいろな避難者の方と話をしますが、思いは同じだなということを感じました。お父さんは現地に残って母子だけで避難してきている人もたくさんいます。そんなお母さんは、お父さん祖父母や親戚と離れて連れてきたことを、それで良かったのか、どっちが正しかったのだろうか、という葛藤をずっと持っておられます。**

私は自分の親にとっても感謝しています。本当は大好きな森、大好きな景色にずっといたかった。子どもなりに持っていた思いや生活を一瞬で奪わ

れたし、避難先でのいじめなど苦労や困難もありましたし、大人になっても例えば、避難した子だから結婚しない、させないと言われたり、という事もあります。

それでも、避難して良かったと私はすごく思っています。私たちの地域は強制的な避難でしたが、そうでなかったとして、私の親は放射能の影響とか色々な事を考え、多分同じように避難したんじゃないかと思っています。私は本当に親には感謝していますし、おかげで今の自分がいると思っています。

—— **次に、音楽のことを。今はどんな音楽活動をされていますか。**

今はコンサート活動が中心で、いろいろなところで歌う機会を頂いています。歌手になることは小さい頃、ヤノフに住んでいたころからの夢でした。ヤノフの家でテレビを見ていた時、軍服の女性が歌っていて、それを聞いてとても感動して泣きました。歌を聞いて泣いている自分にも驚いて、何が起きているのか分からないけれども、自分も同じように歌手になって自分の歌で感動してくれる人がいたら、そんな歌手になりたいと思った瞬間でした。

今、大好きな日本でその夢が叶って歌手として活動していますが、自分の大好きな音楽を奏でると共に、自分のライフワークでもある自分の経験を伝えることが大切だと思います。現在もそういう活動をしています。主にバンドゥーラの弾き語りを中心に活動しています。

—— バンドゥーラの魅力は？

元々は姉が弾いているのを何て素敵な音色だと思って、自分も習い始めました。ある時、とても苦しくて悲しかった時期に、しばらく楽器を触ったりもしなかったのに、余りにも悲しくてどうしたら良いのか分からなくてなぜか楽器を手にとりました。そして、何となく弾いたときに、それまで自分が悲しくてずっと泣いていたことが一瞬で癒されて、柔らかい気持ちになりました。自分が音楽に救われる、助けられるという感覚を覚えて、それからは自分の人生の中ではどんなことがあっても

音楽が自分のそばにあって、本当に何度も何度も自分を救ってくれたのも音楽です。バンドゥーラの音色にはそういう魅力があると思います。人の心にすっと入って、心の弦を触ってくれるような音色や魅力を持っているんじゃないかと思います。

—— 最後に、弁護士に対するイメージや期待などがあれば教えてください。

歌手は人の心を癒したり、悲しいときに元気づけたり、希望を与えたりする役割を持っていると思います。私も歌やバンドゥーラの音色でそういった気持ちや希望を人に伝えるように心がけて、そういうことを感じてもらえるようにしていますし、これからもそういう役割を果たしていけたらいいなと思っています。例えばお医者さんは、病気を治したり、あるいは病気にならないような指導やアドバイスをされていると思います。

弁護士さんたちも、ある意味で

は私たちが住んでいるこの社会のお医者さんの存在じゃないかと思います。人が困った時やトラブルが起こってしまった時に、その人を助けたり問題を解決したり、あるいはトラブルにならないように、事件や事故をどうやって防ぐかということもお仕事として大切な場面じゃないかなと思っています。原発の問題もそうですし、いろいろな問題がたくさんあると思いますけれども、私たちの心に寄り添いながら、どうすれば私たちがよりトラブルなく幸せに生活できるのかということをやったださって、社会にとってはとても大切な職業、大切な存在だと思っています。

—— ありがとうございます。そうなりたいと思います。本日はありがとうございました。

（インタビュー：中 島 宏 治
山 田 敬 子
写 真 撮 影：高 広 信 之）

INFORMATION



CD「旅歌人(コブザーリ)／ナタリア3」

2014年にリリースされた、ナターシャ・グジーさん来日15周年記念アルバム。積み重ねてきた出会いと大切にしてきた想いの深さ、ソングライターとしての魅力あふれる珠玉の作品集



CD付単行本「ふるさと～伝えたい想い～」

ナターシャ・グジーさんが日本語で書き綴った、子ども時代、ふるさとの思い出、そしてチェルノブイリ原発事故。伝えたい想いを歌に込めて、ここに残る5つの曲とともにお届けするCDブック。

注：いずれもAmazon.co.jpのほか、コンサート会場、またはオフィスジルカでの通信販売でのみ購入可能。